

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.9 2009年3月号

- 木を植えるのはあなた自身・・・松崎 丈
- 初めての... ..藤田 博
- 図書館にライオンが... ..渡邊 知子
- 「思い出」について考えさせてくれるこの一冊・・・横田 裕里
- 新刊紹介・・・藤田 博

木を植えるのはあなた自身

松崎 丈

「人びとのことを広く深く思いやる、すぐれた人格者の行いは、長い年月をかけて見定めて、はじめてそれと知られるもの。名誉も報酬もとめない、まことにおくゆかしいその行いは、いつか必ず、見るもたしかなあかしを、地上にしるし、のちの世の人びとにあまねく恵みをほどこすもの。」



『木を植えた男』は、この印象的な文章から始まります。1913年、フランスのプロヴァンス地方にある誰もいない殺伐とした荒地で、エルゼアール・ブッフイエという名の老人が40年にわたって木の種を植え続け、やがて荒地全体が緑と化してゆくという物語絵本です。一農夫であるブッフイエは、ふもとで農業を営んでいたのですが、あるとき妻と息子を突然失い、絶望と孤独に陥ってしまったのです。しかし、ささやかな喜びを少しでも得ようと、広大な荒地に一人で生命の種である木を植えることを決めました。1万本のカシワの木、ブナの木、カバの木...。それは大変に無謀で途方もない作業でしたが、しっかり根づき、立派に育ってきました。1万本のカエデも植えたのですが、その思いもむなしく、苗が全滅してしまいました。それでも諦めることなく、ふたたびブナの木などを植え、自然林と見間違ふほどの緑を増やしていきました。やがてそこに1万を超える人びとが集まり、幸せと生命感に満ち溢れた生活を送ります。荒れはてた地は、たった一人の人間の手によって、豊穡な土地に変わっていったのです。最後の頁では、苦悩しながらも偉大なことを成し遂げた静かな満足感に満ち、やすらかに生涯を閉じていくブッフイエの穏やかな表情の移り変わりが描かれています。そこには次の文章も添えられています。

「魂の偉大さのかげにひそむ、不屈の精神。心の寛大さのかげにひそむ、たゆまない熱情。それらがあって、はじめて、すばらしい結果がもたらされる。この、神の行いにもひとしい創造をなしとげた名もない老いた農夫に、わたしはかぎりない敬意を抱かずにはいられない。」

この物語絵本は、原作者のジャン・ジオノ(1895 - 1970)が、1953年、アメリカの雑誌編集者から、「あなたがこれまでに出会ったことのある、最も並外れた、忘れ難い人物はだれですか - 」と問いかけられて書いたものです。それを受け取った編集者は、偉大な物語に感動し、ブッフイエという人物について調査を行なったのですが、実は実在していないことがわかりました。編集者はその原稿の掲載を拒否しました。そこで原作者ジオノは、拒絶された原稿の著作権を放棄し、自由に掲載されるようにしました。やがて別の雑誌に掲載され、大きな反響を呼んで世界各地に広まりました。ジオノは第2次世界大戦中に戦争逃亡者をかきまい、7カ月投獄された経験を持っています。ジオノのこうした行動に、すでにブッフイエが彼の心の中に息づいていたのだろうと想像できます。

ブッフイエにとって「木」とは、夢と現実をつなぐ想像力と生きることへの根源的な問いであり、かつ生きることへの不屈の精神とたゆまない熱情の象徴なのです。そのような「木」を植え続けてきたブッフイエの精神が、朽ちかけた現実の世界に生きる私たちの心に忘れかけていたものを思い出させるように、静かに優しく語りかけてくるのです。

「木を植えた男」ジャン・ジオノ・文／フレデリックバック・絵／寺岡襄・訳／あすなろ書房

(特別支援教育講座)

絵本には、「初めて(はじめて)の」をタイトルとして持つものが数多くあります。「はじめてのおつかい」「はじめてのおるすばん」「はじめてのおてつだい」「はじめてのおこづかい」「はじめてのキャンプ」など。タイトルとしてはいなくとも、「はじめての」をテーマとするものも多いのは言うまでもありません。どうしてなのかを問うことは、子どもという存在を考えることと一つです。子どもの毎日は新しいものの発見、驚きの連続です。道草をくることが小学生の得意技であるのも、見るもの、聞くものがおもしろくて仕方ないからと言えます。最短距離を、最短の時間でと考えると直線に行く大人との違いです。

しみずみちを・作/山本まつ子・絵『はじめてのおるすばん』(岩崎書店)は、三才のみほちゃんが初めての留守番をする話です。「ママが かちりっど どのかぎを かけると、へやのなかで、きゅうに しーんとしました。」「だいどころの はしらどけいも、「ひとり、ひとり、ひとり、ひとり」と いているようです。」一人になり、不安の募るみほちゃんのところには郵便やさんが小包を届けにやって来ます。みほちゃんは「そおーっと ぼすとのふたを あげて、そとを のぞいてみました。」つづいて新聞の集金人がやって来ます。「ぼすとのふたが ぎこぎこっと もちあがって、おおきな めだまが ふたつ、のぞきこんだのです。」のぞくみほちゃん、のぞかれるみほちゃんからは、初めて「外」を意識したみほちゃんが伝わってきます。



その「外」から帰ったお母さんが、「みほちゃんを だっこして くれました。」留守番のできた「みほちゃんは とくいです。」郵便やさんが入れていき、みほちゃんのごみ箱に捨ててしまった紙を拾い上げながら、お母さんが言います、「いなかの おばあちゃんから、くり、おくりましたって、おてがみ きたでしょ。こづつみは あのくりよ。」おばあちゃんの小包が届くのも「外」から、それを知ることでみほちゃんは一步成長するのです。



筒井頼子・作/林 明子・絵『はじめてのおつかい』(福音館書店)では、五才のみいちゃんが初めてのおつかいに出ることになります。台所でやかんが、なべが沸騰しています。赤ちゃんが泣いています。手の放せないお母さんから頼まれて、みいちゃんは牛乳を買いに出ます。「はじめてのおつかい」です。目線が低いところに置かれていることによって、先を見通すことができないみいちゃんの不安な思いが伝わってきます。目指す店は坂の上、なおのこと見通すことができません。途中、転んでしまったみいちゃんは、大事ににぎっていたお金を落としてしまいます。

転がったお金のすぐ脇には下水道のふたの隙間が。「ほら、そこに落ちているよ」と声をかけてやりたい気持ちに駆られます。

目線が高いところに移され、俯瞰できるページも用意されています。それによって店までの道順をたどることができます。店の名前は「筒井商店」、張り紙にある絵画教室の先生は「はやしあきこ」、「もえないごみは火ようび」などがさりげなく仕掛けられています。それを見つけ出していく楽しみが、周囲のものが見えない、みいちゃんの「はじめてのおつかい」のどきどき感を思い描く助けになっているのです。坂の下まで迎えに来たお母さんと並んで歩く後ろ姿から、「大仕事」をなし遂げたみいちゃんの昂揚感が伝わってきます。後ろ姿である、それだけ余計にそうなのです。

『はじめてのおるすばん』では「外」に行ったのはお母さん、待つのは「内」(家)にいるみほちゃん。『はじめてのおつかい』では、「外」におつかいに行ったのがみいちゃん、待つのが「内」(家)にいるお母さんです。内と外が逆であっても、不安な思いを抱くのは、みほちゃんもみいちゃんも同じ、そして、外に出た母も内で待つ母も同じです。違いがあるとすれば、みほちゃんが三才、みいちゃんが五才ということ。五才のみいちゃんの「はじめてのおつかい」も「はじめてのおるすばん」から始まったに違いありません。留守番のできた自信と喜び、その上におつかいの自信と喜びが積み上げられていくのです。

「はじめてのおるすばん」しみずみちを・作/山本まつ子・絵/岩崎書店

「はじめてのおつかい」筒井頼子・作/林 明子・絵/福音館書店

「図書館」と聞くと、どんなイメージを持ちますか？たくさんの本と出会える場所。時間を忘れて、本の世界にのめりこめる場所。でも、おしゃべりや飲食はだめという決まりがある、ちょっと堅苦しい場所。私にとって図書館は、ほかの場所とは違う特別な、それでいて不思議な場所といった感じがします。そんな図書館を舞台にした一冊の絵本『としょかんライオン』を紹介します。

としょかんライオン



ある街の図書館で働くメリウェザーさんは、とつても決まりに厳しい館長さんです。でも、ほんのちょっとの決まりを守ればだれでも受け入れてくれるやさしい館長さんでもあります。そんなメリウェザーさんの図書館に、ある日、大きなライオンがやってきたのです。図書館員のマクビーさんは、大慌てでメリウェザーさんのところへ行き、ライオンが図書館にいることを伝えます。「そのライオンは としょかんのきまりを まもらないんですか？」「いえ、べつに そういうわけでは・・・」「それなら そのままにしておきなさい」ライオンは図書館で子供たちと一緒に過ごしたり、メリウェザーさんのお手伝いをしたりして過ごすようになります。図書館で過ごすからには、図書館の決まりを守らなければならない、たとえそれがライオンでも・・・。メリウェザーさんは、決まりを守ることを、マナーを守ることを

教えていきます。ライオンは、メリウェザーさんや子どもたちと過ごすうちに、自分から仕事を見つけること、人の役に立つことをしようとするようになります。ライオンは、メリウェザーさんにとつても、子どもたちにとつても大切な存在になっていくのです。

ところがある日、高い棚から本を取ろうとしてけがをしたメリウェザーさんを助けようと、規則を破って大きな声で吠えてしまったライオンは、図書館へ来られなくなってしまいます。ライオンがいなくなったからの図書館は、いつもとどこか違っていました。メリウェザーさんも子どもたちも元気がありません。そんな様子を見たマクビーさんは、みんなのために何かできないかを一生懸命考えます。そして、雨の中、ライオンを探しに出かけるのです。図書館のまわりや車の下、植え込み、木の上。どんなに探しても、ライオンはいません。あきらめて図書館へ戻ると、びしょぬれになって図書館を眺めているライオンがいたのです。マクビーさんはライオンにそっと伝えます。「としょかんのきまりが かわったんですよ・・・おおごえでほえてはいけない。ただし、ちゃんとしたわけがあるときは べつ。」こうして、ライオンはまた図書館に戻ってきました。

決まりは、きちんと守るもの。この一冊は決まりを守ることを図書館の決まりを通して教えてくれます。しかし、それ以上にこの本が伝えているのは、決まりを守ることは確かに大切なことだけれど、時にはそのことよりももっと大切なことがある、そんなメッセージなのです。

図書館と猛獣のライオンという、何ともいえない組み合わせのこのお話ですが、心温まる物語です。誰でも（ライオンさえも）受け入れる温かく、そして広い心をもったメリウェザーさんや図書館に来る子どもたち。そこへやってきた、お行儀のいいライオン。図書館という場所を通じて、出会いや心の交流の素晴らしさを味わえます。

久しぶりに、図書館にでも行ってみようかな。今度、図書館に行ったら、どんな出会いが待っているかな。そんな気持ちにさせてくれる一冊です。

「としょかんライオン」ミシェル・ヌードセン・作／ケビン・ホークス・絵／福本友美子・訳／岩崎書店

「思い出」について考えさせてくれるこの一冊

竹下文子・作 / いせひでこ・絵 『むぎわらぼうし』(講談社)

横田 裕里

この時間がずっと続けばいいのに、誰もが一度はそう思ったことがあるはずですが、しかし、どれほど願っても、時間はせわしく過ぎ去って行きます。

るるこは、大切な時間が移ろってゆく現実を受け入れられずにいます。もう秋になろうとしているのに、麦わら帽子を脱ぐことができないのです。帽子には、楽しかった夏の時間がたくさん詰まっているからです。お姉さんに「はやく、そんな ぼうし ぬいで。・・・もう あきなのに、なつの ぼうしなんか おかしいわ。」と言われても、るるこは「まだ なつよ。」と頑なに拒み続けます。



幼いるるこにとっては、大好きだった時間が遠くへ行ってしまふのが怖くてたまらないのかもしれませんが、確かに、宝物のような時間が過ぎ去ってしまうのはとても悲しいことです。だからこそるるこは、「ぼうしを うんと ふかく ひっぱりおろし・・・すっぽり ぼうしの なか」に入ってしまうのです。けれども、私たちは成長するにつれ、そのような時間を「思い出」として心にしまっておくことを覚えます。そして、時々それを取り出して懐かしむことで、悲しみに耐えるのです。るるこのお姉さんは、そのことを知っています。まだそれがわからないるるこは、麦わら帽子を手放したくないと思ってしまうのではないのでしょうか。

最後になるるこは麦わら帽子を脱ぎます。「つばの ぬいめが おおきく やぶれて・・・そこから なつは でていって」しまったのです。「なつは でて いって」も、大切な時間を「思い出」にすることを知ったるるこは、少しだけ大人になったのかもしれませんが。

(英語教育専攻4年)

新刊紹介

きむらゆういち作・絵 『たんじょうびはきのうえで』(講談社)

待ちに待ったモモリンの誕生日、この日のためにクッキーをつくり、プレゼントを用意したさるのモンタは、「とくべつおしゃれなズボン」をはき、「あたらしいまっかなベスト」を着てパーティへと出かけます。モンタの口からは、「きょうは さいこうだね」とのことばが飛び出します。道々、プレゼントの包みを開けたとき、モモリンが口にすることばを思い描いてみます。「まあ、これ あたしが ほしかった ものよ。」うっとりするモンタは木の根につまずき、プレゼントを水たまりに落としてしまいます。「あーあ きょうは ついてないな。」そう思ったとき、足を踏み外して崖の下に落ちそうに。はずみでクッキーの袋が転がり落ちてしまいます。「もう～、きょうは なんて ついてないんだ。」岩肌を伝って崖を降りたため、ズボンもベストもぼろぼろになってしまいます。「あ～ん、きょうは さいこうに ついてない。」「ついてない」は、そこで終わりにはなりません。恐ろしいオオカミ谷に下りてしまっていたのです。



何匹ものオオカミに追いかけられ、モンタは必死の思いで木に登ります。同じくオオカミに追われたモモリンがそこにいたのです。木の上に登る、最悪の状況をつくり出したオオカミは、モモリンと二人だけのパーティ、最高のパーティのお膳立てをしてくれたこととなります。そうであっても、下には口を開けたオオカミ、絶対絶命であることに変わりありません。「これがあたしの さいごの おたんじょうびに なっちゃったりしてえ～。」と叫ぶモモリン。「食べられる」ことを意識しながら「食べる」、究極のパーティの始まりです。

「ひどい あらしで さいあくの よるだと 思っていたんですけど、いい ともだちに であって、こいつは さいこうの よるかも しんねえす。」嵐の夜に会い、明日また会うことを約束してヤギのメイと別れる、オオカミのガブのことばです。いくつもの偶然が作用することで「最悪」が「最高」に、同じ作者の『あらしのよるに』と同じ形になっているのがわかります。違っているのは、オオカミが横ではなく下にいること、モンタの横にいるのは同じサルモモリン、食べる者と食べられる者が直接向かい合っていないことです。下にいるオオカミの一隻が、「きょう オレも たんじょうびだ」と誕生日を思い出したことで、パーティの準備のためいなくなってしまう、それがモンタに忘れられない誕生パーティをプレゼントしてくれているのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館